めに過ぎない。ともあれ、著者は統一的なアンティフォン像を提出した。Pendrick を見れば、たとえば『夢判断論』について彼の解釈に疑義を呈するような新史料の発見も見られ(F80(b)), その像が磐石のものではないことは確かである。しかし、今後アンティフォン研究を進めるたとえば、そうした細かな点をつつくのではなく、これらを踏まえつつ新しいアンティフォン像を示す「分厚い記述」をなすほかないようにと思われる。細部をめぐる議論に終始した感のある 20 世紀を過ぎて、21 世紀はそうした時代に入ったのかもしれない。

高畑 純 夫(東洋大学)


メリメの短編『エトルリアの壺』を例にひくまでもなく、19 世紀初頭まで「エトルリアの壺」とよばれていたギリシャ陶器の研究は、19 世紀後半以降、資料整理や基礎研究がすすみ、現在新局面にさしかかっている。それは陶器上の画像をどう解釈するかという問題で、いわば「イメージの読み方」「イメージの解釈」の問題だ。

本書の著者 G. Ferrari (1941-) は、E. バーニュール教授の後任としてシカゴ大学から 1998 年ハーバード大学の美術史学科・古典学科の教授に着任し、近年退職した研究者である。本書は著者のギリシャ美術研究の総決算の一冊ともいえる著作で、新たなイメージ解釈を学界へ提起した意欲作でもある。著者は現時点で独自の洞察を世に問うにあたり、これまでの陶器研究の歴史をふりかえるが、この導入部がなかなか見事だ。陶器に限らず、古代ギリシャの視覚資料の利用を考える研究者にとって目を開かれる記述である。

体系的なギリシャ陶器研究としては、1885 年 A. フルトヴェングラーがベルリン・コレクションのカタログを刊行し、1900 年には『ギリシャ壺絵大全』の刊行をはじめた。そして 20 世紀初頭、オックスフォード大学の J. D. ビーズレイ (1885-1970) が、陶画細部の描線に着目し、画家の帰属（アトリビューション）の作業を開始した。画家といっても数多くは職人である。実名がわかっているものの約 40、そのほか通称名や工房名で呼ばれるものが約 900。ビーズレイの研究は、画家の帰属を手段として、陶器の制作年代を判断し、当時の製陶業を跡づけるいわば基礎研究である[関隆志編『特集 ギリシャ陶器と図像表現』『古代文化』44 号 (1992 年 3 月) 参照、研究方法の歴史を概観できる]。
このような鑑定中心の方法に対し、イメージを産み出したギリシャ社会の分析をめぐって、画像を象徴的な言語として検討する方法が1970年代後半から多く登場するようになった。1984年にはパリの大学とローザンヌ大学の研究者が「イメージの都市」と題する展覧会を構成し、古代の視覚イメージ研究の新たな一歩を記したと評価される。この延長に本書フェラーリの研究も位置づけられる。

イメージをどう解釈するか。いいかえると「イメージをどう読むか」。これは、美術史学では永遠の課題である[ここ最近、美術史学と歴史学のイメージ解釈の差異について議論が活発に行われ、たとえば次の論考でその概要をつかむことができる。永澤雄『イメージ資料を読み解くギュンスブルグ』『思想』808号（1991年10月）39-83頁]。現在、テキストを額面どおりに受けとることがまず不可能なように、イメージも額面どおりには受けとれない。ある神話場面が描かれているする。その神話場面の背景に、どのような現実をみることができるだろうか。日常生活の一コマを描いた絵画もある。だが果たしてこれを日常生活の一場面とみなしていいのだろうか。日常生活と神話イメージの境界があいまいな場合もある。たとえば、死んだ戦友を担ぐ戦士が描かれている場合、銘があると、英雄アキレウスとアイアースと判断できる。だが銘がない場合、英雄世界の一場面となるが、同時代の戦場での一場面ととなる。それとも逆に両場合をダブらせた見果、評者の研究テーマのひとつ、ギリシャ絵画における死生観の表現でも、神話と現実のイメージの交錯はたえず組上にあがる危険な問題である。

著者フェラーリは、このような視覚イメージの分析のために、視覚上の「メタファー（隠喩）」という考え方を提案する。本書では第1～3章で、家庭内の女性を描いた、いわゆる生活場面をあらわした絵画とその分析方法をとりあげる。第4、5章では、男性のイメージに目をむけ、「男らしさ」（andreaia）の視覚表現についてクーロス像等の作例を論じ、第6章は男性の同性愛について、第7章で、女性のイメージに戻り、通過儀礼の表現（たとえば、ブラウン出土の陶器断片上の描写）を論じ、最終章では結婚の視覚表現を考察する。

第1～3章で中心となる「糸紡ぎ」の場面をとりあげる。フェラーリは「糸紡ぎ」の場面を、「化粧（身づくろい）」の場面とともに、女性の理想的イメージを表したものととる。この画像には勤勉で身体美を備えた女性のイメージが確かにみとれる。だが、「糸紡ぎ」の女性の前に、財布らしき小袋を手にした男性が描かれると、場面の解釈は一転する。これは、身持ちのいい女性風の演出
をした高級婦人、つまり「糸紡ぎをするヘタイラ」の視覚イメージとみなされるからだ。だがこれも十分な解釈とはいえない。詳細な議論にここでは立ち入らないが、アテナイ社会でヘタイラを露骨に金銭授受の場面中に表現したとは考えにくいからだ。このような視覚イメージのあいまいさについて、まだ議論が尽くされていない。ここにフェラーリは「メタファー」の議論を導入する。

画像は現実をリアルに描写したものですでなく、「たとえ」とする見方である。具体的には、神話場面か生活場面かと画像を単純に分類する前に、画面がどう構成されているか、構成要素を抜き出し、個々の要素の組み合わせから内容を解明しようとする（巻末の付録2で、ピーズレイの画家の帰属をもとに、「糸紡ぎ」の主題にかかわる600点余の陶器を、場面構成により6つのグループに分類したリストを掲げる）。その結果、小袋を持つ男性に向かい合う「糸紡ぎ女」を、男性から求愛される女（バルテノス）と解釈するにいたる。これも定説に反しているが、市民の女性やヘタイラと従来考えられてきた各視覚イメージを再検討するための重要な試論となるだろう。そして画像資料を緻密に分析することで、ジェンダー研究にも新たな問題提起をおこなっている。

本書の題名は直訳すると「言葉のあや」「比喩的表現」で、壇絵の画像を視覚上の「たとえ」ととらえている。だが、本来それが画像の本質ではなかったから画像もテクストと同様、巧みに操作されている。そして質の高い画像ほど重層的だ。このような画像を読み解くために20世紀初頭以来の基礎研究がまず土台となる。そして隣接分野との連携も不可欠になる。フェラーリの議論に注文をつけるとすれば、文献資料を共時的分析とし、また陶器の画題と器形の関係の議論が薄い点だろう。

少なかっため問題を残しながらも、本稿はこれまでのギリシャ陶器研究をふまえた上で、男性と女性の視覚イメージを通じて当時の社会に光をあてかける。

今後の歴史学の視覚資料の利用にも多くの示唆を含む、抑制された語り口に情熱を秘めた刺激的な論考である。

中村るい（放送大学）